

平成二十七年 度 中 等 部 入 学 試 験 問 題 第 一 回 (国 語)

◆答えはすべて解答用紙に書くこと

-
- 次の(1)～(5)の――線部を漢字に直しなさい。
- (1) 事故を減らすタイサクを考える。
- (2) 足りないところをオギナウ。
- (3) カセツの窓口をつくる。
- (4) ボウエンキヨウを使つて見る。
- (5) おもしろいアイデアなのでサイヨウしたい。

【三】 次の(1)～(5)の問いに答えなさい。ただし(1)～(3)はひらがなでもよいが、(4)(5)は漢字で答えること。

- (1) 下の意味となるように、空欄に生物の名前を入れて慣用句を完成させなさい。
「飛ぶ」を落とす勢い」……とても勢いがある様子。

- (2) 線部が下の意味となるように、空欄に体の部位を入れて慣用句を完成させなさい。
「」が空いたら、こちらに来てください。……今やっていることが終わったら。

- (3) 下の意味となるように、空欄に語を入れてことわざを完成させなさい。
「」の石」……他人のどんな言動も自分をみがくためには役立つ。

- (4) 線部の語の対義語（反対の意味の語）を漢字2字で答えなさい。
本当に必要かどうか考えてみよう。

- (5) 次の文の空欄に漢字を入れて四字熟語を完成させなさい。
「機」髪のところ救出された。

【三】 次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「」。「」記号などを字数にふくみます。）

まだ海外で知られていない日本文化の本当のよさを伝えたい。海外の新聞やテレビで伝えられている日本のイメージを見て、実際の日本の姿を伝えたい……。そのような思いから、「もっと日本文化を発信したい」と、情熱をもって取り組む人も増えてきている。「日本文化の発信」に関するプロジェクトもよく見かけるようになった。

A、アメリカに長年住んでいて、また、最近ドイツに一年滞在して、そのような日本からの「発信」を外から見ていると、その情熱や努力にもかかわらず、期待したほどに成果があがっていないのではないかと、と感じることがしばしばあった。日本では「日本文化を海外に発信した成果」と大々的にメディアで伝えられていることが、現地の視点から見たらそれほどインパクトがなかった、ということを見ることがあった。

① そのいっぽうで、日本では知られていなくても現地で受け入れられている文化紹介のプログラムに出会うことも、少なからずあった。たとえば、ドイツに住んでいたときに、日本文化のイベントで人気があったのは、日本人の落語家によるドイツ語の落語公演や、日本のサイレント映画を活動弁士の説明で見せる上映会などだった。このような企画が海外で行われているということは、日本ではあまり知られていないのではないだろうか。

「発信したい気持ち」と「知りたい気持ち」のミスマッチ

振り返ってみると、世界の国々の日常生活のなかに日本発の文化が浸透するようになったのはそれほど古いことではない。日本文学が「文学らしい」英語に翻訳されて英語圏の読者に広く読まれるようになってから、せいぜい一〇〇年程度しか経っていない。また、日本の哲学や、仏教などの宗教にしても、以前は「神秘的」とはいわれても、欧米の哲学や宗教からはワンランク下だと思われていた。しかし、そのような偏見は、もはやなくなりつつある。

そして、私の教えている大学にも、アメリカやヨーロッパだけではなく、台湾や中国、シンガポールなどのアジアから、

中東から、そして南米から、日本文学や日本文化を学びたいと学生が集まってくる。その多くは、小さい頃から日本のアニメやドラマなどのポップカルチャーに触れたり、武道の道場に通ったりして、日本発の文化に親しんで育ったのだという。

「B」、「発信」の方向がずれている、と感じてしまうのはどんなときだろうか。

この点について思うのは、日本の側の「発信したい気持ち」と、世界の受け手の「知りたい気持ち」にミスマッチがあるのではないか、ということだ。

送り手の側の日本人々が、「自分たちが発信したいこと」にこだわり、日本の事情を海外にまで持ち込み、日本のやりかたでものごとを進める。その結果、受け手の知りたいこと、見たいことに応えることができなかったり、受け手の側のしくみにうまく乗らなかつたりして、結果として伝わらないことがある。

いっぽうで、受け手のニーズをよく知ったうえで、現地の人々が受け入れやすいように考えられたプロジェクトはよい結果が出る。

ほんの少し発信の方向を変えれば、送り手と受け手のミスマッチは軽減され、世界の人々が日本発の文化や芸術の素晴らしさに触れる機会ももっと増えるだろう。

ただし、そのためには、受け手の側から日本文化がどう見えているか、また、日本文化が現地でどのように人々に届けられているのか、さらには、受け手の側の専門家や読者はどのような関心を持っているか、などのことを、もっと知る必要があるのではないだろうか。

スシポリスとカリフォルニアロール

しかし、それだけでなく、グローバル化が進み、世界のさまざまな文化が互いに浸透し、影響しあうなかで、「正しい」日本文化を発信する」という発想じたいを、大きな視野から見直すことも、必要なのではないか。

もはや、日本人が「正しい」と思っている文化のありかたそのままを海外に発信するだけでは十分ではないのではないか。

「C」、日本で生まれ、世界中で親しまれているもののひとつに、寿司がある。

ヨーロッパやアメリカでは、ヘルシー志向やアジア文化への関心もあり「SUSHI」は大人気だ。特に最近では高級なスシ・バーだけではなく、回転寿司や若者向けのテイクアウトのスシが人気のようだ。パリの街では、いたるところにSUSHIの看板を目にしたし、イギリスのヒースロー空港のスシ・レストランは旅行客でにぎわっていた。また、ドイツでは、スシ専門店だけではなく、中華料理やタイ料理のレストランの一角がスシ・コーナーとなっているレストランも少なくなく、アジア料理としてのスシの人気ぶりがうかがえた。

しかし、その味は日本人の味覚に合うものばかりではない。ドイツのライプツィヒに一年ほど住んでいたとき、市街地にテイクアウトのスシ専門店があった。ランチタイムに行列ができていたので、試しに食べてみることにしたが、日本では見られないネタの組み合わせのものも多く、私の好みには合わなかつた。

このように世界中でさまざまなスシが生まれるようになって、二〇〇六年、農林水産省は、正統な日本料理を提供する海外のレストランを認証する制度を開始すると発表して話題となった。「正しい寿司の味」を世界に伝えたいという目的で立ち上げられた制度だったが、海外のメディアは、日本人は自分たちの食文化を海外に押しつけるな、という論調で批判した。ワシントン・ポスト紙は「気をつける、スシポリスがやって来る」という表現を使い、「スシポリス」という言葉は日本国内のメディアでも話題になった。こうした反発を受けて、日本食の認証制度はとりやめとなった。

「正統な寿司」の味を知っている日本人が、世界各地のスシの味を、日本人の味覚に合うかどうかで判断するのは自然なことかもしれない。そのいっぽうで、世界に「正統な寿司」の味を押しつけることが、外国の寿司屋、とくに日本人でないスシシェフの反発を呼ぶことも理解できるだろう。

外国のスシは、日本人の味覚に合わなくても、現地の人々の味覚に合わせることで寿司の世界的な普及に貢献しているという面もある。

たとえば、アメリカで生まれたカリフォルニアロールは、スシを、一部の人は知らないエスニック料理から世界中で誰でも知っているメジャーな料理にした。日本でも最初は違和感をもつ人が多かったようだが、現在では逆輸入されてすっかり定着した。その意味では、世界各地のスシを頭ごなしに否定することもできないはずだ。

振り返ってみると、日本では世界各地の料理を取り入れ、独自にアレレンジしながら新しい料理をつくってきた。ナポリタンのスパゲティや、ご飯と一緒に食べるカレーライスなどがそのよい例だろう。最近では、日本でもスパゲティに限らずいろいろな種類のパスタを食べることができるし、ナーンやチャパティと食べるキーマカレーのような「インド風」カレーを出すレストランも増えている。しかしそれでナポリタンやカレーライスが消えてしまうわけではない。

このような例は、日本発の文化が世界でどのように知られ、理解されているかを考えるうえで、大きなヒントになるのではないだろうか。

グローバル化が進み、国境を越えた文化の流れがますます増えることにより、日本発の文化を楽しむ人の多くは日本語を話さず、日本に行ったこともない人が大多数というのが普通になっていくだろう。外国人が日本の文化を知るには、まず日本語を学び、しばらく日本に住むのが普通、というのは、もう、過去のことになりつつある。

日本文化を日本の外で楽しみ、日本文学を日本語以外で、日本の外で読む、そんな時代が始まりつつあるのだ。

(河野至恩『世界の読者に伝えるということ』より)

注1 「プロジェクト」……企画。計画事業。

注2 「メディア」……新聞やテレビなど、情報を伝えるなかたちをする機関。

注3 「サイレント映画」……無声映画。無声映画には、映画上映中に画面の人物のせりふをしゃべり、話の筋を説明する活動弁士がいる。

注4 「ミスマッチ」……釣り合わないこと。

注5 「ニーズ」……必要。要求。

注6 「グローバル化」……社会の国際化が進み、理念やルールが共通化していくこと。

注7 「エスニック料理」……民族料理。

注8 「アレンジ」……新しく構成しなおすこと。

問1 ——線①「そのいっぽうで」の「その」とはどのような内容ですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、海外で今までとは違うイメージの日本文化を発信したい人が増えていること。

イ、海外で日本文化を情熱的に発信している人が今まで以上に増えていること。

ウ、海外に向けて日本文化を発信しているからこそ、成果の期待が大きくなっていること。

エ、海外に向けて日本文化を発信している割には、期待したほど成果が上がっていないこと。

問2 ——線②「日本の側の「発信したい気持ち」と、世界の受け手の「知りたい気持ち」にミスマッチがある」という状況で、「ミスマッチ」を解消するためにはどうすることが必要だと筆者は考えていますか。「～ことが必要。」につながるように、80字以内で説明しなさい。

問3 ——線③「「正しい」日本文化を発信する」という発想」とはどのような考えですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、海外の人が学んだ正しい日本文化を海外の人を通して海外の人に伝えるという考え。

イ、海外の人が思っている日本文化があり、それを日本人が海外の人に伝えるという考え。

ウ、日本人が思っている正しい日本文化があり、それを海外の人に伝えるという考え。

エ、日本人が学んだ正しい日本文化を海外の人を通して海外の人に伝えるという考え。

問4 ——線④「好み」について、ここでの使われ方と同様の意味を表す語を本文中より漢字2字でぬき出して答えなさい。

問5 ——線⑤「こうした反発」とは、だれのどのような反発ですか。説明しなさい。

問6 ——線⑥「世界中で誰でも知っているメジャーな料理にした」のはどのような考え方をとったからのですか。その考え方を「」という考え方。」につながるように本文中より13字でぬき出して答えなさい。

問7 ——線⑦「それでナポリタンやカレーライスが消えてしまう」とはどのようなことをいっているのですか。その説明として最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、日本人が作ったナポリタンやカレーライスが広まり、海外の人が作った本場のスパゲティやカレーがなくなるといふこと。

イ、日本人が作ったナポリタンやカレーライスがなくなり、海外の人が作った本場のスパゲティやカレーだけが残るといふこと。

ウ、海外の人が日本で作った本場のスパゲティやカレーを日本人は食べなくなってしまふということ。

エ、海外の人が日本人といっしょに作ったナポリタンやカレーライスを日本人は食べなくなってしまふということ。

問8 ——線⑧「日本発の文化が世界でどのように知られ、理解されているかを考える」について、「日本発の文化」を世界の人たちはどのようにして受け入れるようになってきていますか。説明しなさい。

問9

〔A〕〔C〕に入る語として最も適切と思われるものを次の中よりそれぞれ一つ選び、記号で答えなさい。（ただし、同じ記号をくり返し使うことはできません。）

ア、では イ、しかし ウ、さらに エ、たとえば

四 十四歳のあすかは、^アヴェ・マリア・ヴァイオリンと出会い、その音色に魅^みせられて新しい持ち主となりました。半年後、このヴァイオリンの持ち主だったユダヤ人の少女ハンナのことをよく知っているとこの音楽家のカルザス氏が、仕事で来日しました。あすかは、ヴァイオリンを売ってくれた楽器商の清原さんと母と一緒にカルザス氏の話^{はなし}を聴^きに行きました。次の文章を読み、あとの問いに答えなさい。（ぬき出しと字数が決められている問題は、すべて「」。「」記号などを字数にふくみます。）

『これはハンナの持っていた^アヴェ・マリア・ヴァイオリンに間違いありません。彼女が亡^なくなって、僕は歴史をみなさんに忘れてもらいたくなくて^注アウシュヴィツ博物館に持って行ったのですが、いつの間にかアウシュヴィツの野に捨てられていたかのような噂^{うわさ}が広がっていたのです。そのヴァイオリンが、どうして?』

『それは、イギリスのオークションに出品されていたのです』

清原さんが短く言うと、カルザスさんはすべてを理解したように一つ大きくうなずいた。

『オークションにかけられる理由があつたんだろうが、どちらにせよ^アヴェ・マリア・ヴァイオリンの運命だ。しかも日本の少女のところでよかつた。日本人は物を大切にしてくれるからね。アスカ、君は何歳だい?』

英語で年齢^{ねんれい}を聞かれていることが分かつたので、私は「フォーティーン」と答えた。それを聞いてカルザスさんは、「おお」と天^{あめ}を仰^{あお}ぐようにして喜んだ。

『不思議なもんだ。ハンナと同じ年齢じゃないか。ハンナもそうやってヴァイオリンを背中に担^かいでいたんだよ。君と同じだ。まったく同じだ。神が^アヴェ・マリア・ヴァイオリンを君のところにもうまく運んだんだ。①なんてすばらしいことだろう……。アスカ、なにか弾^ひいてくれないだろうか』

②「じゃあ、シューベルトの『アヴェ・マリア』を少し……」

こういった状況^{じょうきょう}になったからといって、ヴァイオリンの腕^{うで}が急に上がるわけではない。もしかしたら『アヴェ・マリア』だけは弾かされるかと思って練習^{れんしゅう}をしておいたけれど、出来栄^{できばえ}は相変わらずで、自分が上手にヴァイオリンを弾けない

ことが悔やまれて仕方がなかった。

耳を塞ぎたくなるような曲を弾いてカルザスさんをつかりさせたくなかったので、和音で弾かなければいけないところも無難に単音で弾くことにする。

『……この音だ』

演奏中は目を閉じて演奏に聴き入っていたカルザスさんだったが、演奏が終わると耳の奥に残った音色を味わうようにゆっくりと瞼を開いた。見るとカルザスさんは目の縁を赤くしているのが分かる。

『うまく弾けたね、アスカ。ハンナと同じくらいうまいよ。アスカ、君はまるでハンナの生まれかわりのようだ』

もちろん、カルザスさんが私のことを大袈裟に賞賛していることくらい私にも分かる。けれども、あのひどい出来の『アヴェ・マリア』を褒められて、心の底から申し訳ない気分になった。

後悔先に立たずとは言うけれど、普段からずっと練習しておけばよかった。私の拙いヴァイオリンをこんなに喜んでもらえるなら、もつといい演奏をしてあげられたらよかったのに。

ヴァイオリンを弾き終わると、スタッフの一人が大人にコーヒーを、私にココアを運んできてくれた。

カルザスさんは椅子に深く腰をかけ直すと、ゆっくり味わうようにしてコーヒーを口に含む。

『さて、何から話そうか……』

部屋には強い暖房が入られていたけれど、その暖かさを感じないほど緊張した空気が流れ、清原さんと母と私の三人は、老人の言葉を固唾をのんで待った。静かな部屋に、雪のかたまりが地面に落ちる音だけがザザッと響いて、なぜか不安になる。カルザスさんは温かな湯気のたつコーヒーを一口含みながら、静かな口調で話し始めた。

『こんな寒い日に、温かなコーヒーを飲めることが、もう当たり前の生活になってしまっているなんて信じられないな……。きみは、こういった生活が特別だと思ったことなどないだろうか？ ミスターキヨハラ』

清原さんはうなずくこともせず、ただ、体を硬くしたままだった。

『アスカ、これから話をすることは、君にはあまりに衝撃的であり、ひょっとすると想像ができないことかもしれない』

カルザスさんは私に向き直り、少し前までの慈愛に満ちた眼差しとは違った厳しい視線を私に向けた。

『君は、きつと生まれた時から何不自由なく暮らしているだろうから、今の自分が幸せであることすら感じなくなってるんじゃないかね。今日の話を直接僕から聞くといいことは、君の生涯にもっと幸せをもたらしてくれるだろう。本当の幸せを少なからずとも分かってくれるだろうからね。……君は学校で歴史を勉強したかい？』

カルザスさんがゆっくり言葉を選んでくれるおかげで、話していることの意味はほとんど分かった。ただ、英語でなんて答えたらいいのか分からず「イエス」とだけ言う。

『……そうか』

老人は窓の外に降る雪を眺めた。

『歴史を勉強しない子はいけない。しかし、知っているだけじゃあだめだ。何年に何が起こったかなんて年表を覚えても、それは歴史を知ったことにはならない。史実に基づき、自分の頭でいろいろなことを考え、感じる事が勉強なんだよ。そして、人間にとってこれから先、どう生きていくべきか、幸せとはどんなことなのかを追求し、世界に目を開き、きちんとした自分の意見を持つことが歴史を学ぶことの意味なんだ』

カルザスさんはコーヒーをテーブルに置き、こちらを向いた。

『……そうだな、君の持っている『アヴェ・マリア・ヴァイオリン』を、君と同じようにハンナも背中に担いでいた』

目を細め、私の全身を眺めるように見ると、老人は感慨深げに深く息をついた。

『君は素敵な黒髪をしているが、ハンナはフランス人形のような金髪の女の子だった。目は澄んだ深い青色をしていた。その目の色と『アヴェ・マリア・ヴァイオリン』が、彼女を地獄から救ったんだ。彼女の姉さんも弟も父親も母親も、おじいさんもおばあさんもみんな殺されてしまった。君たちは地獄を見ることも死ぬことも自分だけは関係ないと思っているだろう。そんな君達にどうあの当時のことを表現していったらいいのか……難しいところだ』

カルザスさんは大きなため息をつき、肩をすくめてやれやれというように頭を左右にゆつくりと振った。

『アスカ、君のおじいさんは何歳だい？』
「七十……」

英語の発音が心もとないので、指を七本立てると、カルザスさんは一つうなずいた。

『それじゃあ、ちょうど君のおじいさんが生まれた頃の話だよ。一九三三年の話だ。おじいさんが生まれた頃かあ、と想像を巡らしてくれ。おじいさんが赤ちゃんで、お母さんのお乳に吸いついている頃を想像してみたまえ』

「やだ、想像したくない」

思わず笑うと、通訳をしながら清原さんも母もつられて笑った。

『ハッハッハッ。そうだ、その調子だよ。おじいさんにはちよつとかわいそうな発言だったが、気持ち悪いって感じるくらいに想像してみることが大切なんだ。それは年表を語呂で覚えることより少し時間がかかるかもしれないが、ずっと自分のためになるし忘れない。自分を構築するものになるんだよ』

「構築？ どうして自分を構築しなくちゃいけないのですか？」

英語が少し難しくなってくると、清原さんが通訳の代わりになって話を進めてくれた。

『とても大切な質問だね。君は幸せに生きているだろう。人間は幸せに生きる権利があるんだ。アスカもアスカのお母さんも、キヨハラも、もちろん僕もだ。しかし、幸せに生きる権利を持っていたって、実際は幸せな人もいれば不幸な人もいる。一杯のコーヒーに感謝して幸せに思える人がいれば、コーヒーが飲めることなんてあたりまえだと思っている人もいる。どっちが幸せな人かと聞かれたら、アスカはなんて答える？』

「一杯のコーヒーに感謝する方？」

『ああ、そうだね』

私の答えに満足したのか、カルザスさんは目を細める。

『あたりまえだと思う人は、人生が豊かなことは確かだ。しかし、この一杯のコーヒーがおいしい、嬉しいと思える人だって、生活が豊かじゃなくても幸せだってこともある。自分を構築するというのは、自分の感性を豊かにして幸せを感じる心を育

てるということなんだよ。幸せになって、その幸せを人にわけてあげられる人間になるということだ。そうなるには、ぼうつとしてはダメだ。いろいろなことを勉強して、頭の運動、心の運動をすることが君たちの義務なんだよ』
私たち三人は、この一人の老人の話に、いつしか我を忘れてしまうほどのめり込んでいった。

(香川宜子『アヴェ・マリアのヴァイオリン』より)

注 「アウシュヴィッツ」……第二次世界大戦中、ナチス・ドイツの強制収容所の一つがあり、ユダヤ人などが多数虐殺された場所。

問1 カルザス氏は、——線①「なんてすばらしいことだろう」と言っていますが、どのような点についてすばらしいと思っているのですか。適切と思われるものを次の中より二つ選び、記号で答えなさい。
ア、アヴェ・マリア・ヴァイオリンの噂が広がって、皆に歴史を忘れさせたくないという思いがなかったこと。
イ、イギリスのオークションに出品されて、アヴェ・マリア・ヴァイオリンの価値が世界に認められたこと。
ウ、ハンナと同じ年格好のアスカが、アヴェ・マリア・ヴァイオリンの新しい持ち主になったこと。
エ、アヴェ・マリア・ヴァイオリンが、物を大切にする人の多い日本人のもとに偶然行き着いたこと。
オ、ハンナもよく弾いていたシューベルトの『アヴェ・マリア』を、アスカが演奏してくれること。

問2 ― 線②「こういった状況」とは、どのような状況ですか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、外国の著名な音楽家の前で、最も苦手な『アヴェ・マリア』を演奏しなければならない状況。
 イ、アヴェ・マリア・ヴァイオリンに強い思い入れのある人の前で、演奏しなければならない状況。
 ウ、日頃のヴァイオリンの練習成果を、たった一度の演奏によって評価されてしまうような状況。
 エ、ほとんど見ず知らずの人の前で、全く心の準備の無いまま演奏しなければならない状況。

問3 ― 線③「目の縁を赤くしている」のは、どのような心情の表れだと思いますか。その心情説明として適切でないとされるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、アヴェ・マリア・ヴァイオリンの音色の変化に、長い年月の経過を実感している。
 イ、アヴェ・マリア・ヴァイオリンに再び巡り会えた喜びに、胸をふるわせている。
 ウ、アヴェ・マリア・ヴァイオリンの持ち主であったハンナの姿を思い浮かべている。
 エ、アヴェ・マリア・ヴァイオリンの音色に触れて、ハンナの演奏を思い出している。

問4 カルザス氏は、―― 線④「アスカ、君はまるでハンナの生まれかわりのようだ」と述べていますが、アスカと同年齢だったハンナの周囲では、どのようなことが起こっていましたか。具体的に述べている一文をぬき出し、最初の5字を答えなさい。

問5 ― 線⑤「こういった生活」とはどのような生活ですか。本文中の語を使って8字以上10字以内で説明しなさい。

問6 ― 線⑥「厳しい視線を私に向けた」とありますが、カルザス氏の視線が変化したのはなぜですか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、ヴァイオリンの演奏を聞いて、日頃の練習不足を見抜き、練習の注意点を話しておきたいと思っていたから。
 イ、初対面ではあるものの、音楽の世界の先輩として後輩のアスカを甘やかしてはいけなさと考えていたから。
 ウ、毅然とした態度をとらなければ、中学生のアスカにはきちんと話を聴いてもらえないと思っていたから。
 エ、若い人には理解するのが難しい話だろうとは思いつつも、どうしてもアスカに伝えたいことがあったから。

問7 ― 線⑦「君は学校で歴史を勉強したかい？」とたずねたカルザスさんは、歴史を勉強するのは何のためだと考えていますか。80字程度で説明しなさい。

問8 ― 線⑧「君のおじいさんは何歳だい？」とカルザス氏がアスカのおじいさんのことを質問したのはなぜですか。最も適切と思われるものを次の中より一つ選び、記号で答えなさい。

ア、アスカの祖父が自分と同世代かどうか確かめて親近感を持ちたかったから。
 イ、日本人との会話の接点が見つからず、まずは共通の話題を探ろうとしたから。
 ウ、具体的なイメージを思い浮かべるためのきっかけを作りたいと思ったから。
 エ、亡くなったハンナのおじいさんやおばあさんのことを思い出していたから。

問9 カルザス氏は、―― 線⑨「自分を構築する」とは、どのようなことだと述べていますか。そのためにすべきことも踏まえて、80字以内で説明しなさい。

平成二十七年 中等部入学試験 第一回 (国語) 解答用紙

(印の部分は何も書かないこと)

334

(1)	
(2)	$\widehat{u}$
(3)	
(4)	
(5)	

1



(1)	
(2)	
(3)	
(4)	
(5)	



問 2				問 1
70	50	30	10	
80	60	40	20	

KNOWLEDGE
 SKILLS
 COMPETENCE

四

四

の解答らんは裏面にあります。

受験番号		
氏	名	



